

## 新潟市内野における伝統音楽の発展と創造

森 下 修 次・松 浦 良 治

### 1. はじめに

我々は、先太鼓の調査<sup>(1)</sup>を皮切りに内野まつりへの積極的な参加、盆踊りの復興<sup>(2)</sup>などに関わってきた。これらはともすれば忘れてしまいがちな郷土の文化を考え、記録に残し、さらには地元の教育活動にも利用するなど意義のあるものだと考えている。これらの研究調査は今も継続して行っている。他方、地域の文化の発展を考えたときに伝統を守るだけでよいのかという疑問も生ずる。町の発展、文化の発達を考えれば、新しい創造があつてしかるべきだと思われる。今回、いわゆる民謡を土台にした新曲の創作という、いわば従来の音楽様式をふまえながら新しい地域の音楽を創造していく、しかも趣味の範囲で終わらすのではなくあくまでプロの音楽家としての創作作業過程に関わることができた。それらを通して、地域における創造性とは何なのか考察を試みたい。

### 2. 日本の各地域の伝統音楽分野での創造

現代の音楽の創作は、多くはマスメディアを使って普及することが多いと思われる。そのため東京や大阪など大都市に集中することはやむを得ないことであつた。しかしながら、琉球音楽や津軽三味線にみるように伝統を守り地域密着の音楽でありながら、全国あるいは世界に向けて発信している音楽も多い。琉球音楽や津軽三味線は、ロックなど日本の伝統音楽とは異なった音楽との融合など新しい試みもされ、マスコミに取り上げられてますます発展していくと思われる。静岡に本部のある「鬼太鼓座」のように、新潟県佐渡を発祥の地としながら世界的に注目され

る音楽創造集団として発展したものも存在する。これらの音楽は既に伝統音楽の枠を越え、創造を通して次世代への音楽を築きつつあると言ってよいであろう。

### 3. 内野地区の伝統音楽分野での活動

新潟市内野地区の音楽活動はマスコミに派手に取り上げられることは少なく、地道に行われている。祭礼や盆踊りの音楽も伝承されているが、民謡などの活動も盛んである。例えば、内野民謡協会主催による「唄と踊りの祭典…秋の民謡まつり」は毎年催されている。Fig 1は2003年のプログラム<sup>(3)</sup>表紙である。10団体33演目が約4時間にわたって演じられ

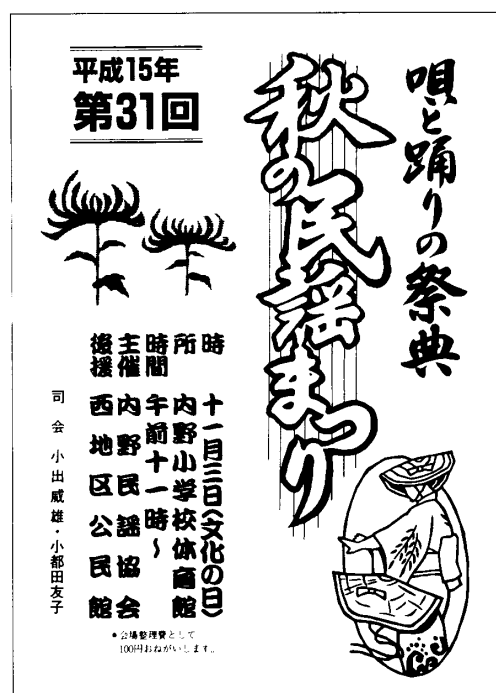


Fig. 1 内野民謡協会主催「秋の民謡まつり」プログラム表紙

た。演目内容は「内野小唄」「新潟音頭」「岩室甚句」など地元を主題にした作品が多いが、東京音頭など他地域の民謡も取り上げられている。これらの活動はあくまで同好会として行われており、出演者の年齢構成も老若男女様々である。

#### 4. 内野地区のプロ<sup>(4)</sup>として音楽活動例

内野地区を拠点としてプロの音楽活動をしている高大周<sup>(5)</sup>は秋田県生まれで、上京の後、1968年から

新潟市内野地区内の高山に住居を定め現在に至っている。高大周はもっぱら作詞家、プロデューサーとして活動している。現在は高大周音楽事務所を自宅に設けている。なお、高大周の現在までに至る簡単な履歴はTable 1のとおりである。

高大周は内野に住居を定めて以来、大民謡流しや秋の民謡流しの開催、内野民謡協会の設立など、内野地区における重要な民謡行事に関係してきた。同時に自身も作詞、プロデュースを通して音楽活動を行ってきた。

Table 1 高大周の民謡歴

年	歳	できごと
1939年	0歳	秋田県平鹿郡増田町に生まれる。
1955年	15歳	中学校卒業、上京
1968年	29歳	新潟市高山に定住
1969年	30歳	民謡三日月会を結成
1969年	30歳	内野民謡協会を立ち上げに加わる
1970年	31歳	内野祭大民謡流しの形態を確立に尽力。
1973年	34歳	第1回「秋の民謡まつり」開催。
2000年	61歳	いち条しんや（高大周）作詞の「成瀬のとも同窓／さわらびの宿」がクラウンレコードから発売される（TP-668）。
2000年	61歳	一条信也音楽事務所設立
2002年	63歳	芸名を高大周に改める。同時に事務所も高大周音楽事務所に名称変更
2003年	64歳	「内野ふる里音頭」等の制作に入る。

#### 5. 高大周の現在の活動

高大周が行っている現在の活動は次の通りである。

- ① 「新川太鼓」の創作と演奏
- ② 「新潟音頭」のリメイクと制作
- ③ 「内野ふる里音頭」、「新潟繁昌節」の創作と制作

新川<sup>(6)</sup>は西川流域の洪水防止と排水のために掘削された内野地区内を流れる人工河川である。1817年に掘削を開始し実際に通水したのは1820年と言われている。したがって新川太鼓が世に出るのは1817年以降と言うことになる。企画・プロデュース：高大周、作曲：永島鼓山による新作音楽である。この曲は新川掘削の歴史に思いを馳せて創作されたということである。一人の奏者が3台の異なった太鼓（左側に締太鼓、中央に大太鼓、右側に中丸太鼓）を受け持ち5人～7人で演奏する編成になっている。

2003年9月13日、内野まつり「大民謡流し」の直前に内野四ツ角で初演された。太鼓の演奏指導は作曲者の永島によって行われ、小学生のグループと大学生のグループで各々演奏された（Fig 2～3）。なお、

**奉納行事**

**13日** 大民謡流し（小雨決行）  
集 合…午後6時30分 花火打上げ  
開 始…午後7時  
終 了…午後9時  
新川太鼓披露  
開 始…午後6時40分  
会 場…四ツ角

**14日** 消防コミュニティパーク（はしご車試乗体験等）  
午後12時30分～午後1時30分  
西地区事務所駐車場  
バンドフェスティバル  
JR内野駅前 午後1時30分  
〈雨天の場合〉JR内野駅 午後2時  
内野小学校吹奏バンド 日本文通高等学校プラスバンド  
内野小学校吹奏バンド マーチングバンド 新潟西高等学校吹奏バンド  
内野中学校吹奏バンド 楽 団 う ち の 大 学

町内山車引廻し  
午後5時30分～午後9時  
みこし渡御  
午後4時30分～午後7時30分

Fig. 2 内野まつりチラシの一部

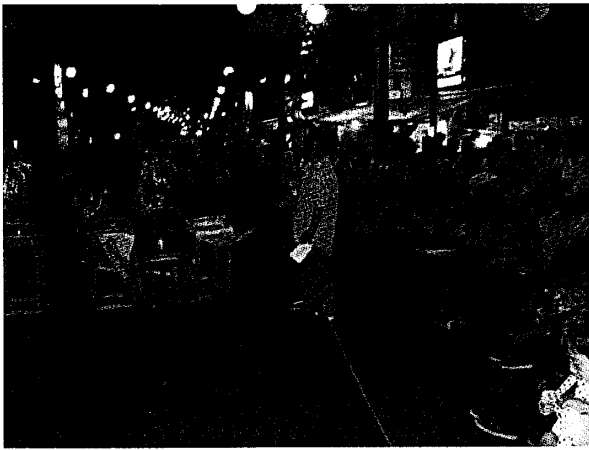


Fig. 3 新川太鼓路上パフォーマンス

松浦はこのとき篠笛で演奏に加わった。その後第31回秋の民謡まつり（内野小学校体育館）でも披露された（Fig. 4）。楽譜<sup>7)</sup>をFig. 5に示す。

「新潟音頭」は元々1954年、作詞：野村俊夫、作曲：上原げんと、歌：神楽坂はん子によるもので、島倉千代子の歌による「四季の新津<sup>にいず</sup>」のB面に収録されたものである。歌謡曲風の編曲であった。1971年永島鼓山が樽を使ってアレンジし、1974年三原勝美が三味線を加えてアレンジするがあまり大衆受けすることなくぱっとしなかった。2001年リメイクして再度録音することになり、高大周作詞により新しい「新潟音頭」として作り直された。なるべく原曲

の雰囲気尊重し民謡調で編曲し、発売を目指すことになった。なお、著作権については同年承諾を得ている。

「内野ふる里音頭」, 「新潟繁昌節」は作詞：高大周, 作曲：三原勝美による新作である。これらの曲を創作するにあたり高大周は次のように述べている<sup>8)</sup>。

「昔ながらの郷土のうた音楽も勿論大事な事ではありますが、それに加えて、郷土に暮らす人たちのため、又郷土に帰ってくる人達のため心にひびくふる里のうたや踊りを発掘また創作し、それで触れる天象が一時でも心に喜びを感じたり、ふる里の良さを再認識していただきたいのが念願であり我々のはげみにしたいのです。」

「内野ふる里音頭」, 「新潟繁昌節」はデモテープ作成のため2003年6月26日に新潟大学教育人間科学部合唱ホール<sup>9)</sup>で録音を行った。録音メンバーは太鼓：永島鼓山, 三味線：三原勝美・丸山幸子, 歌：小林イツ子・本間美笑子・景山利恵子, 篠笛：松浦, 録音：森下で行われた。なお、その後三原勝美が死去したため、以後の出演・録音には小林真由美が担当するようになった。同年8月5日に新潟市役所西地区支所駐車場で催された西新潟商工会主催盆踊り大会でゲスト出演し観客にアピールを試みた（Fig. 6）。同年10月30日には新潟大学教育人間科学部合唱ホールで本格的な録音を試みた（Fig. 7, Fig. 8）。



Fig. 4 新川太鼓（民謡まつり）

# 新川太鼓

永島鼓山 作曲

イヤー ソレ

9

*f*

*p* < *f*      *p* < *f*

(イ) *solo f*      2      2      2

*tutti*      2      2      2

*mf*

(ロ) *p* < *f*      *p* < *f*

2      2      2

Fig. 5

(ハ)

(ニ)

(ホ)

(ヘ)

(ト)

*solo ad.lib.*

*tutti*

*f*

*ppp f ff*

ヤァー

※(イ)～(へ)のsoloは順番が入れ替わっても省略しても良い。

原則としてそれぞれ2度演奏すること。

(ト)の箇所は実際の演奏において永島が即興で演じていた。

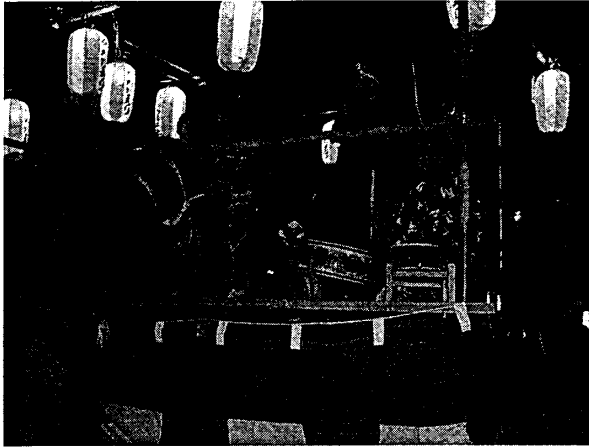


Fig. 6 西新潟商工会主催盆踊り大会での演奏



Fig. 7 「新潟繁昌節」の録音風景1



Fig. 8 「新潟繁昌節」の録音風景2

11月3日の秋の民謡まつりにおいて民謡大周会として「新川太鼓」とともに出演を果たした。それらの曲の楽譜をFig. 9～11に示す。

## 6. 考察

これらの活動は新潟市の中心街から離れた内野で行われたことに意義がある。音楽活動をはじめとするプロとしての芸術活動は、パトロンや代価を払ってくれる客がいてこそ成り立つ。そのため、人口密度の高い地域の方が展開には有利である。内野地区は京都にあるような他を圧倒する伝統文化があるわけではなく、また県庁所在地とはいえ中心地から外れている。この30年ほどの間に新潟大学をはじめとするいくつかの大学や高校が内野地区に設立あるいは移転したことから文教地区としては発展したといえるが、そのことが地域の文化的発展に寄与すると

は断言はできない<sup>30</sup>。そんな中でプロの活動をしていくこと、すなわち住民がその価値を認め代価を払うことは、住民がプロの活動に関心を持ち、文化的に共鳴しているからできるに他ならない。このような例で成功例は最近の例だとサッカーJリーグのアルビレックス新潟<sup>31</sup>に当てはまる。プロスポーツ不毛の地といわれた新潟にJリーグのチームを作って、観客を動員出来るに至ったのは、新潟市民にサッカーの面白さを伝え、スタジアムにわざわざ足を運ぶことがどんなに楽しいことかを分かるようにし、同時に観客に意識の変化をもたらすようにしたからである。スタジアムで他の観客と一体になり応援する快感は来た者でないと分からない。それと同じことが音楽にもいえる。

高大周の戦略はFig. 12によるになっていると考えられる。今年度の活動がデモテープの作成や素人の民謡大会に無償で出演して存在をアピールしたのも、

# 新潟音頭

作詞 高 大周  
 作曲 上原げんと  
 編曲 三原勝美

前奏 三味線



ハア — — — — わしが にいがた アリヤサノ サ わしが



にいがた じまんじゃ — ない — — が — にひやく ごじゅ まん の



どっこい おおじよた い — ほんに すみよい よいところ みんな

後奏 三味線



いちどで すく と—ころ すくところ



Fig. 9

# 内野ふる里音頭

作詞 高 大周  
作曲 三原勝美

前奏

はーるの おらーがの

じまを ーいえー ばー まつの みどりに しんかわ ざくら

だれが ひくやら しゃみのーおーとー ゆれる かわー  
アソレ ソレ

ものーボン ポリとー しのぶ むかしの よつ であー

みー サーー サーー うた おーよー おどろー ーよー

ふるさと おんどでーすこやーかーにー

後奏

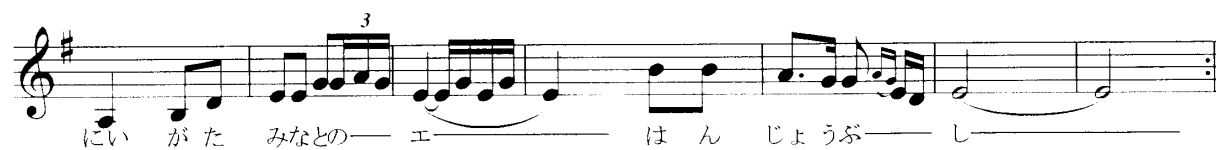
Fig. 10



# 新潟繁昌節

作詞 高 大周  
作曲 三原勝美

前奏 (三味線・篠笛)



後奏 (三味線・篠笛)



Fig. 11

デモテープの作成→ ↓	盆踊り大会などで演奏→ ↓	レコーディング→ メジャーレコードから 発売（自費出版） ↓	マスコミにアピールな ど？
舞踊教室など関係機関 に配り曲を振り付け等 してもらうなど	なるべく多くの人々に 曲を知ってもらう。	関係機関に売り込む？	

Fig.12 創作曲の売り込み戦略

創作した曲を知って欲しいからである。次のステップは大手レコード会社から発売である。自費出版になる可能性が高いが民謡会はレーベルがものをいう世界であり、今後の展開のため、投資することになっている。

高大周の戦略は始まったばかりで今後どのように展開するかは分からない。彼自身の考える「郷土に暮らす人たちのため、又郷土に帰ってくる人達のうた」の創造のためには地元での息の長い活動とメジャーデビューのどちらが得策だろうか。プロの音楽家としてはより多くの収入が多い方が良いに違いない。もしそうなったときでも、地元の活動とメジャーデビューを両立させる、すなわち内野の地元の人に支えられ批判され、それがよりよい作品の創造に結びつくのなら、新潟市の中心街から離れた内野で行われたことに意義があるといえる。反対に内野を離れていくのなら「郷土に暮らす人たちのため、又郷土に帰ってくる人達のうた」はそうでなくなることを意味する。これからどう展開していくのか楽しみであると同時に、注意深く見守っていく必要があると思われる。

## 7. 謝辞

高大周音楽事務所ならびに高大周氏には多くの資料をご提供いただきました。感謝いたします。

## 8. 文献および注釈

- (1) 伊野義博・松浦良治・森下修次「祭囃子の教材化試案－内野先太鼓の事例から－」新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター紀要「教育実践総合研究」創刊号pp.31-46 2002
- (2) 森下修次・松浦良治「内野町における盆踊り復活の試み」新潟大学教育人間科学部紀要 第5巻第2号pp.189-196 2003
- (3) 平成15年第31回「唄と踊りの祭典 秋の民謡まつり」(内野民謡協会主催)プログラム
- (4) 「プロの音楽家」の定義は、「演奏および作品等の創造による収入により、生計を維持できる者および維持できることを目指す者」としておく。いわゆる「プロ」の演奏家は日本中にごまんといるが、その中において演奏収入のみで生計が成り立つのはほんの一握りである。
- (5) 高大周(旧芸名いち条しんや、本名：高橋富之助)、1939年秋田県平鹿郡増田町生まれ、民謡作詞家。
- (6) 南憲一「稿本 新潟市域の各地区の概要」  
<http://www.city.niigata.niigata.jp/info/nouchi/denutino.htm>
- (7) 楽譜は4曲とも松浦、森下が作成・浄書した。
- (8) 高大周が松浦宛に書いた私信。
- (9) これらの録音はあくまで大学との共同研究という位置づけで行っている。
- (10) 例えば内野地区では新潟大学の移転や新潟地震がきっかけとなり地元の住人とタイプの異なった住人が多数住むようになった。そのことにより、それまで無かったタイプの文化、例えば音楽活動では吹奏楽や合唱などが盛んになる一方、学校の配慮によって小中学生が平日の昼間に堂々と内野まつりに参加できたのが、他地域から移転してきた子どもの親のクレームによりそれが出来なくなり、平日の祭りの維持が難しくなったなどが挙げられる。
- (11) アルビレックス新潟はJ1ではなく格下のJ2リーグに所属しているにもかかわらず、2003年の観客総数がJ1を含めたJ1全体で一番多かった。常に3万～4万人の観客を維持できるのは、スポンサーや地域にばらまかれた招待券が相当数あるとはいえ、新潟の都市規模から考えると驚くべき数字といえる。ちなみに2003年の最終戦で優勝を決めJ1昇格を果たした。